〔東京家政大学研究紀要　第36集 (1), P.191～202, 1996〕

日系アメリカ文学
—強制収容所内の文学活動⑥グラナダ収容所—

篠　田　左多江

(平成7年9月30日受理)

Japanese American Literature : the Literary Movement in the Granada Relocation Center

Sataye SHINODA

(Received September 30, 1995)

はじめに

第2次大戦中，強制収容所へ送られた日系アメリカ人の文学活動についての調査も今回で6回を数える．これまでポストン，トゥーリレイク，ヒラリヴァー，ハートマウンテン，トパーズの各収容所について小論をまとめた[1]．今回はグラナダ収容所について考察する．グラナダは，10カ所の収容所中もっとも平穏であったとされている．強制収容経験者の誰もが「おとなしい収容所」と異口同音に評価するグラナダで，どのような文学活動が行われていたのであろうか．ここではわずか1冊であるが，英文の文芸誌*Pulse*が発行されている．これまでと同様に，新聞および英文誌に表われた文学活動を明らかにしたい．ただし，マイクロフィルム化された新聞は1943年度分を欠いている．それを補うため，グラナダ収容所のニュースや文学作品の掲載された『ユタ日報』および『格州時事』を用いて考察した．

1．グラナダ収容所の生活

グラナダ収容所（正式には転住所）は，WRA（戦時転住局）の管轄下，コロラド州プラワーズカウンティ（Prowers County）にあり，グラナダから南西に1マイルの大草原に位置する．東に20マイルほど行くとカンザス州境があり，周囲は開拓されていたが，約1万エーカーの収容所用地はセイジブラッシュが生え，野性のひまわりの咲く荒れ地であった．グラナダの町は1844年，先住民との交易拠点として建設され，当時の人口はわずか342人であった．このあたりからアーカンソー川流域にかけて，古くから先住民チェイニー族（Cheyenne）が狩猟生活をしていた．収容所はチェイニー族長オチニー（Ochi－nee）の美しい娘の名をとって，アマチ（Amache）[2]と呼ばれた．正式に開かれたのは，1942年8月27日であるが，この時点で収容所は未完成であったため，早期に到着した者はまだ建設中の施設に入居しなければならなかった．人口は最大7,318名[3]で10カ所の収容所中もっとも少ない．

収容者はおもにサンタ・アニタおよびマーセド仮収容所から移動した人びとで，9月中に移動が完了した．前者にはロサンジェルス地域の都市居住者で，商人，医師，弁護士，科学者，庭師，ホテルやレストランの経営者や従業員などが多かった．一方，後者にはカリフォルニア中央部の農村とサンフランシスコ湾地域の人びとが含まれ，農業従事者が大部分を占めていた．収容所全体の人口を職業別に見ると，農業40%，家内労働15%，専門職および管理職・経営者が10%，事務員13%，半熟練労働者16%，不熟練労働者6%となっており，農業関係の仕事に従事する者が圧倒的に多いことがわかる．これらふたつの収容所から来た人びとの生活環境が大いに異なっていたことから，両者の間に折にふれて対立が生じたようである．とくに青少年の問題は深刻で，ロサンジェルス出身の少年たちの中には，ズートスーツ[4]を着てナイフをちらつかせるなどしてギャングを形成する者がおり，農村部出身の親を驚かせ，子供たちを非行からいかに守るかが大問題になった．その後1944年6月にジェローム収容所の閉鎖にともない，500名が移動してきた．これによってふたつのグループの反目も自然に解消したようである．

コーテーズ（Cortez）[5]の農村出身のヴァレリー・マツモトはマーセド仮収容所からグラナダへ送られた．

国際コミュニケーション科　英語第1研究室

彼は列車で，カリフォルニア州ベイカースフィールドからアリゾナ州経由でグラナダへ到着した．夏のアリゾナの炎熱のなかを行くのに水もなく，座席の下からベッドを引き出すことさえ許可されず，眠れないまま丸2日かかって駅に着き，さらに列車のなかで1夜を明かしたのち，トラックに詰め込まれて収容所入りしたという．マツモトの場合は特にひどかったようで，収容所への移動でも時期や場所によって待遇の差があることが分かる．収容所は未完成で，当てがわれた部屋へはいると，床はれんが敷きだが，土間とみまがうほどに土がつもっていた．そこに軍隊用簡易ベッド，ダルマ型ストーヴ，石炭入れ，ほうきなどが雑然と置かれていた．収容者は袋だけのマットレスにわらを詰め込んで簡易ベッドに置き，極度の疲労にことばもなく眠りにおちたという．

収容所の施設はすべて他と同じで，住居用のバラック1つに6部屋，12のバラックが集まって1ブロックを構成していた．収容所全体は29ブロックに分かれていた．所長はジェイムズ・リンドレー（James Lindley）で，開所から閉鎖まで変らなかった．収容所の運営は18才以上の収容者によって選挙された代議員で構成され，独自の憲法をもつ Community Council があり，自治制を採っていた．ほかに収容者による消防隊と警察組織があった．企業活動としては，組合による売店の経営および農園があったが，これも他の収容所と同様である．アマチ共同消費組合の名のもとに物品の販売などが活発に行われていたようである．この収容所の特色ある企業は，シルクスクリーン（捺染孔版）の印刷所であった．これは1943年に合衆国海軍の依頼で作られたもので，45名の収容者が働き，海軍の全ポスターの4分の1を作成していた．

他の収容所と同様，農業，養鶏，養豚なども行なわれた．これらは1943年に始まり閉鎖まで続けられた．WRA は土地[6]，農具，種を提供して，農業を奨励した．食料の自給自足ばかりでなく，農作業を通じて収容者の精神的，肉体的健康を保持することも目的であった．土地はかつて牧草地として使われたこともあったが，野菜などを作ろうと試みた人はいなかった．そこで，収容者は大根，セロリ，レタス，トマトなどの野菜および飼料用のトウモロコシやアルファルファなどを植えつけた．しかし，灌漑の不備から数百エーカーの作物が旱魃の被害を受けたり，施設不足のため，鶏の半数は放し飼いされ，豚は狭い所へ入れたために病気が蔓延したなどの問題も多かった．二世のなかには，WRA に反抗し，市民である二世を収容所にいれた合衆国は食料を与えるのが当然であるから，食料生産には協力しないと主張する者もあった．また，一律16ドルの月給は安すぎるという理由で，給料の高い外部の農園労働を志願する者も多く，農業プロジェクトはつねに労働者不足に悩まされた．外部の給料は単純労働でも少なくとも1カ月150ドル位であった．結局，懸命に働いたのは外部就労許可が出ない一世の年長者ばかりであった．周辺には農場もあり，他の収容所のように農業に適さない地域というわけではなかったが，収容所の農業プロジェクトは他と比較してあまり成功しなかったようである．

収容所は海抜約1,000メートルの丘の上にあったため，暑さもさほどではなく，年間の平均気温は摂氏12.4度，冬は雪も降るが積雪はあまり多くなかった[7]．しかし，砂嵐の襲来はこの収容所も例外ではない．午前中好天でも午後になると西から北にかけて雲が湧き，急に風が吹き出して砂嵐が巻き起こったという．人びとが悩まされたのは砂嵐だけではなかった．所内には鈴蛇と呼ばれて恐れられたガラガラ蛇，亀とコオロギがいた[8]．コオロギは毒を持つ種類で，作物を食い荒すほか，毒がつくために干した洗濯物の管理に注意しなければならなかった．

市民権を持つ人は全人口の3分の2で，忠誠登録でも質問27，28にイエスーイエスと答えた人が全体の99.8%にのぼり，全収容所中でもっとも高い合衆国への忠誠率を示した．第2次交換船[9]で日本への帰国を希望した人は35名，不忠誠となってトゥーリレイク隔離収容所へ送られた人はわずか105名で[10]，全収容所中もっとも少なかった．こうした背景から他の収容所で起こったような一世，二世，帰米二世の間の不和や衝突もなく，もっとも平穏な収容所とされている．

しかしここは，ただ1カ所ポリオ菌に汚染された収容所となった．1943年10月に相次いで4名の患者が出た．当局はこれらの子供たちをデンヴァー市内の病院へ送って治療すると同時に，外出禁止令を出して，10月から11月初旬にかけてグラナダおよびラーマー（Larmer）の町へ買物に行くことを禁止した[11]．同時に子供の参加する行事なども中止になった．

忠誠を明らかにした人びとは，こぞって外部に就労した．職業別にみると，1943年5月中の外部就労者503名中，288名が農業，64名がサンタフェ鉄道，21名が家事，

他は機械修理業や庭園業に従事していた．このように外部へ働きに出る人びとが増加するにつれて，収容所内の労働者不足は深刻化し，43年秋には所内の農園の収穫や，暖房用石炭の運搬などにも支障をきたすまでになった．このためWRAは9月中の外部就労を禁止したほどであった．これは収容所の内部と外部の賃金格差があまりにも激しかった結果である．44年6月には，少しでも格差を是正するために，所内農園の労働者の20時間以上の超過勤務分を現金で支給する特別措置がとられた．

兵役に就いた二世男子がもっとも多いのもグラナダの特色である．総計494名が入隊し，30名あまりがヨーロッパ戦線で戦死した．収容所が閉鎖されるほぼ1カ月前の45年9月，収容所の西にある墓地に慰霊塔が建立された．所内では130名が死亡しているが，そのうち120名の遺骨は家族に引き取られ，10名が所内の墓地に埋葬された．塔の建立費用は約300ドルで，所内の有志と各団体が負担した．和田牧師が題字を書き，9月6日に500名が参列して除幕式が行なわれた．この塔は現在もなお収容所跡地に残っている．このとき人口はすでに2,850名に減り，収容所は1945年10月15日に閉鎖された．

1945年建立の慰霊塔
現在は建物の中に保存されている．
1994年，筆者撮影

2．*The Granada Pioneer*と『パイオニア』

収容所の開設から約1カ月半後の10月14日に初めて新聞*The Granada Bulletin*が発行された．これは24日まで2日おきに発行された暫定的な新聞で，この間に新聞の名称が公募された．その結果，新聞名は*The Granada Pioneer*と決まり，10月28日から1945年9月15日まで週2回，水曜日と土曜日に発行された．所内で謄写版印刷され，発行部数は3,000部，各家庭へ無料で配布された．日本語版は『ぱいおにあ』または『パイオニア』で，初期には英文紙の記事の翻訳，のちには英文紙とは別の独自の記事も多く掲載された．紙面は英語版6ページ，日本語版4ページの全体で10ページという構成が一般的であるが，ニュースの多少によりページ数が変化した．編集スタッフは英語，日本語合わせて26名の収容者で構成されていた．日本語版専任担当者は4名であった．これは1944年6月頃一時発行停止になり，7月15日に再刊されている．これは何かの記事が原因であったらしいが，具体的な記述はなく，原因は不明である．停止期間にジェロームからの移動があり，再刊されたときは前任者が辞任して，ジェロームから来たばかりの今野一郎が，戦前に新聞に係わっていたという理由で日本語版の責任者になった．

*The Granada Pioneer*のなかには文学作品はまったく掲載されていない．日本語版には，わずかながら随筆や短詩形文学の作品が載っている．1943年および44年1月から8月までの新聞が残っていないため，44年9月から45年9月までの1年間の新聞記事から推測しなければならないが，とくに43年に多くの作品が掲載されていると推測できる根拠はない．たぶん44年と同様であったと考えられる．グラナダでは日本語の文芸誌が発行されず，日本語新聞の紙面も限られていることから，文学好きの人びとは，戦争中にも継続して発行されていた『ユタ日報』，『格州時事』，『ロッキー新報』[12]（旧『ロッキー・日本』）の日本語文芸欄を発表の場としていたようである．

グラナダにも他の収容所と同様に，短詩形文学のいくつかの文学グループが存在した．俳句の中村梅夫，新俳句および短歌の唐津文夫，文子夫妻，短歌の畑麥浪，川柳の岡米利などは戦前から文学活動に係わっていた．また，佐々木ささ舟は戦前から随筆を書いており，アメリカ紹介の書『アメリカ生活』[13]を出版していた．ささ舟は1883年福岡県に生まれ，早稲田大学を卒業後渡米した．鉄道や農園で働いたのち，日本語学校の教師，庭師などをして生計をたてながら，おもにロサンジェルスで日本語新聞に寄稿した．開戦当時は，日本語学校教師の経歴によりFBIに逮捕され，モンタナ州ミズーラ抑留所へ送られた．その後，釈放されてグラナダ収容所で暮らしていた．

彼は『パイオニア』紙に日本の「近江八景」などを真似て「亜町八景」[14]と題し，収容所内のさまざまな風景をおもしろおかしく描写している．グラナダという名

は日本字を当てはめにくかったためか，一世はもっぱらアマチを使い，亜町という字を当てている．「亜町八景」は，「８Ｈの夕景」[15]，「食堂の鐘」，「溜池の野鴨」，「四本柱の砂嵐」[16]，「警察の夜警」などのテーマで書かれている．彼は食堂の鐘について，つぎのように書いている．

「此處の食堂の鐘と言ったら何所のを見ても大きな鉄管の筍切りばかり．ガンガンガンと三つ鳴らすのが食事の知らせ．鐘は上野か浅草かの詩情もなければ，今鳴る鐘は暮六つのと言った寂しさもない．いわんや諸行無常だなんて響きなんかある筈もない…」江戸の俳楷や歌舞伎，平家物語などをふまえた軽妙な筆の運びは，読む者を惹きつける．

引き続いて「亜町裏八景」[17]が連載され，収容所生活のさまざまな場面が詳細に描写されている．「洗濯場の朝」，「防火週風景」，「コーオプ店の繁昌」，「将棋と碁」，「泥中の蓮の花」，「老人会議」，「長屋の猫の額」，「男子用産院」と題する８回の連載である．この中で，「泥中の蓮の花」という題を見ると，誰でも収容所にも蓮の咲く池があったのかと想像する．しかし読み進むうちに，これは養豚場で泥まみれになった豚の鼻を指すと分る．また，「男子用産院」とはトイレのことだと分るまでには，少し時間がかかる．このようなユーモラスな読み物は，日本語に飢えた一世の間の数少ない娯楽として，人びとに読まれたであろう．しかし，収容者はこれを読んでも心から笑うことはできなかったにちがいない．自分たちのおかれた境遇を笑いとばしたあと，読後には一抹の寂寥感に襲われたであろう．ささ舟は独特の表現によって彼でなければ表わしえないひとつの世界を形成している．

「長屋の猫の額」には，「欺くて去勢された住民は同じ太陽の下とは言ひ乍ら来る日も来る日も変りあひまして変り栄のない生活に与へられた長屋前の猫の額をほじくって草花を蒔いたり，野菜を作ったりして憂さをはらしてゐるのである」と書かれている．大多数の人が忠誠を表明したこの収容所ではあったが，人びとの心の中には割り切れない気持ちがわだかまっていたであろう．「同じ太陽の下」でも，ドイツ人やイタリア人は拘束されなかったが，日系人は強制収容されたという矛盾と無念さを，一世は黙々と土いじりをして耐えている．自らが一世であるからこそ，ささ舟にとってこのような人びとの気持ちは察するにあまりあるものだったであろう．

このようなささ舟の創作活動を快く思わない人の存在もうかがえる．『ユタ日報』紙上でささ舟がアマチ区長会への皮肉ったことに端を発し，区長会側は『パイオニア』紙に声明文を発表した[18]．それはささ舟の著作を「豚哲学」と軽蔑し，新聞に連載をもっているからといって得意になるなという意味であった．これに対しささ舟は，自分の文が新聞に載ったからといって得意になるような人間ではないと反論した．つまり，文学などに無縁であったのに下手な詩や歌を投稿して，新聞に掲載されると大喜びをして得意になっている人が多くいたことを暗に嗤っているのである．そして自分の文を理解できないのは，文学の分らない教養のない人であると主張する．戦前に作品を出版した一世はごくわずかであり，ささ舟は自分がその数少ないひとりで，しかも大学教育を受けたという誇りを持っていた．狭い収容所の中に，生れも育ちも違う人びとがひしめきあって暮らすとき，必ずさまざまな軋轢が生れるが，これもそのひとつであろう．

ささ舟はこの後，「たぬき」[19]という随筆を連載するが，謄写版印刷の際，あまりにも誤字が多かったという理由で連載を中止する．彼は「字が化けてしまった」とおもしろく表現しているが，鉄筆を担当した人が教養がないと言いたかったのかもしれない．

「パイオニア」には，1944年に４回に分けて連載された葛原宗太郎の短編小説「雪」がある．葛原は若い帰米二世であったようだが，経歴などは不明である．妻を亡くした父親とその末の息子の収容所内での交流を描いた作品である．父は３男３女の親だが，内気な性格に加えて目が不自由で，妻を失ったこともあり，ますます自分の中に閉じこもりがちである．おとなになっている上の５人は，そんな父をはがゆく思って次第に離れて行く．また幼い末息子の常だけが彼の心の支えである．連載３回までに綿密な人物描写があり，先が期待されたが，父が塙保己一を例にあげて，勉強せよ，勉強こそが夢を叶えてくれると，息子に諭すところで突如として終ってしまう．小説がどのように展開するか，期待を持たせただけに陳腐な結末は惜しい．作者はまだ未熟で，習作の域にも達しない作品である．

外部転住が許可されると，かなり早い時期から外部へ出る人が多かったため，住宅や就職などの外部情報，すでに出た人の経験談などが多く掲載されて，小説や随筆などを載せる紙面がほとんどなかったようである．短歌，俳句，川柳なども他の収容所の日本語新聞と比較して，

その数は少ないようである．閉鎖予告の出た直後のアマチ吟社の句にはつぎのようなものがある[20]．

独身の閉鎖気軽く荷をまとめ　小田中　曲水
子沢山閉鎖予告へ腕を組み　渡辺　雅楽
いざ閉める声に怯ゑた群羊　浜川　白砂

独身者はどこへ行けと言われても身軽だが，家族持ちはそういうわけにはいかない．収容所では食事の心配もなかったが，閉鎖後は自分で生活しなければならない．子供が多ければそれなりの苦労も予想される．また，収容所から出て元の家へ帰った日系人に対して，カリフォルニアでは排日分子による発砲事件も起こった．そのようなニュースを聞くにつけ，世間の敵意の前に身をさらすのを案じる気持が先にたつ．これらはすべて一世の句であるが，そのおかれた立場によって，閉鎖への対応も千差万別であったことがよく表わされている．

これまで考察したように，グラナダ収容所においては新聞を中心とした文学活動はきわめて低調であったといえよう．

3．『ユタ日報』とグラナダ文芸人

グラナダの新聞はWRAからの通達や再定住関係のニュースで占められ，文学を育てる余力がなかったが，文芸好きの人びとは『ユタ日報』『格州時事』『ロッキー新報』などの文芸欄を通じて交流し，作品を発表した．戦争中，軍事地域内の日本語新聞はすべて発禁になったが，それ以外のコロラド州，ユタ州では一時発行停止になったのちしばらくして再刊の許可が出された．これら3紙は戦争中に日本語で読める数少ない貴重な新聞となった．これらの新聞には「…だより」といった形の収容者からの寄稿によって，すべての収容所の情報が集められていた．したがって，たとえば『パイオニア』のみでは知りえないニュースを知り，日系人全体のおかれた状況を概観することができた．かつては1地方の小さな新聞であったこれら3紙が，戦争によって全米規模の情報源になったのである．

グラナダ収容所の人びとも大いにこの新聞を利用して文学活動の輪を広げていった．この中で松井秋水は，すでにサンタアニタ仮収容所時代から「うまや文芸」[21]を提唱していたが，グラナダに移動したのち，『ユタ日報』および『ロッキー新聞』に「アメリカ流転文芸」を連載した．連載は移動の完了した翌月，つまり1942年10月から始まっている[22]．松井はその中で「日本文の出版物が飢饉なるこの際に健全なる文学論が産まれるだらうと思ふ．そは単に花鳥風月を詠ずる文学論ではなくて移民地の流転生活の産物として心辜めた涙の収穫を望みたい」と述べている．移民地で詠まれた作品のなかには，その地の特色がなく，日本で詠まれたものと区別がつかないものも多い．松井は日本から書籍が輸入されないこのときこそ，日本の影響を排除し，移民地独自の文学を創り出すことができると期待した．

「アメリカ流転文芸」の編集は松井に一任されていた．参加したのは，グラナダ，マンザナー，ハートマウンテン，ローワー，ジェローム，トパーズ収容所の文芸グループであった．まず，各収容所に短歌や俳句など各々の部門の選者をおく．作者が自分の作品を選者宛てに送ると，選者はすぐれた作品を選んで松井に送り，松井が部門ごとに編集して掲載するという方法で作成していた．収容所にあっては，実際に会合を開いて集まることができないという状況から生れた合理的な編集方法であった．選者のなかには，グラナダの中村梅夫，ハートマウンテンの常石芝青，高柳沙水，ローワー，ジェロームの保田白帆子など，当時すでに名を成していた人も含まれていた．当初は毎月，詩，短歌，俳句，川柳などの多くの作品が掲載されて，文芸欄が多くの紙面を占めていた．

「アメリカ流転文芸」の中から，グラナダ収容所の人びとについてみると，次のような作品がある．

「流転の詩」

流れの果てに
砂嵐すさぶ転住地の生活
今日も風は吹く
大地を襲うやうな
恐ろしいこの形勢

暗雲はわれわれをまねいて
知る人も　知らぬ人も
悩みに涙をこぼす
我れ　この日を遁れようと
幾度と知らず
彼方の光を思ふ
でも　やるせなき

囚れの運命が
我が歩道を遮る[23]　　後略

これは通形オサムの詩であるが，作者はたぶん一世であろう．大部分の詩はこのように，強制収容という予期せぬ境遇を嘆いたものである．
同じ作者は，
「吾命はあしたの露とはかなけれ東の國を拝みまをす」
という短歌を詠んでいるが，詩の中の「彼方の光」，「東の國」とは日本を指した表現と思われる．忠誠登録では合衆国に忠誠を誓っても，一世の心のより所はやはり日本であったことがうかがえる．

「アメリカ流転文芸」が始まって，ようやくこの欄が定着したかと思われる1943年5月に，松井はグラナダ収容所を去った．その後この文芸欄も自然に消滅してしまった．理想は高かったが，わずか半年の文芸運動に終った．

この後は，『ユタ日報』のなかにすべての収容所を包括した文芸活動は見られない．代りに43年中に，各収容所で『ハートマウンテン文芸』，『北米短歌』，『ポストン文芸』，『鉄柵』などの文芸雑誌が次つぎに発行され，発表の場がそちらへ移ったためであろう．『ユタ日報』には小説の類はまったく掲載されていない．グラナダ収容所の文芸人では，先に述べた佐々木ささ舟ただひとりが随筆を連載している．ささ舟は1944年に『パイオニア』紙に「亜町八景」その他を書いたが，『ユタ日報』には1945年2月から「亜町漫録」を9回，「浮世かがみ」を22回連載した．いずれも収容所生活のひとこまを描いたものだが，「浮世かがみ」には従軍した日系人のエピソード，時事問題を扱ったものなども含まれている．

この中でささ舟は，合衆国と日系人の関係を日本人は先生で，白人の生徒に沿岸地方の農業を教えたが，生徒は恩知らずで，農業を覚えてしまうと邪魔になった先生を追い出そうとしたと表現している[24]．そして，カンザス州の新聞記者がささ舟にインタヴューに来ると，真珠湾攻撃のときには，アメリカは西部沿岸の防備体制が整っていなかったので，日系人の存在に神経質になって日系人を強制収容したのはやむをえなかったと皮肉をこめて答えたという．これに対して記者は，罪を犯していない一世を日本人だからという理由だけで，検挙，拘留したのは誤りであったと述べた．「風呂屋さん」では，ささ舟がかつてアイダホ州で食料品店を営んでいたころのこと，風呂のボイラーマンとして働いていた時の思い出などが語られている．彼は本を読む時間が欲しくてその職についたという．移民の悲哀がこもった作品である．

「浮世かがみ」の中の「情の晩餐」は，リンドレー所長がグラナダから交換船で日本へ帰国する35名を，出発の前の晩に御馳走をして送り出したというエピソード．食事係は通称ハーレーというハワイ出身の50才位の呼び寄せ一世であったが，所長の許可で，禁止されていた缶詰や肉を使ってすばらしいご馳走を用意したという．リンドレー所長はグラナダの人びとから慕われていたようだが，その人柄を偲ばせる話である．

「干ゑび」は2回の連載だが，日系兵士のエピソードである．フランス戦線で負傷して休暇をとり，グラナダに帰った兵士に，作者が干えびとビールを出すと，兵士は干えびにまつわる次のような話をした．日系兵は軍の携帯食に飽きて和風のものが食べたくなる．川をはさんで敵のドイツ軍と向い合っているとき，兵士たちはたくさんの干えびを食べ，咽が乾いて我慢できなくなった．水の補給は期待できない．自分の持っていた水をすべて飲んでしまったひとりの兵士は，ついに意を決して川へ水を汲みに行ったが戻って来なかったという悲しい話である．戦争にまつわる話はこの他にも，フィリピンで日系通訳兵が拾った日本兵の遺品のノートとその内容を扱った「紀念帳」，グラナダの歌人唐津文夫，文子夫妻の三男三郎の戦死と，彼が戦場から母に宛てた手紙を公開した2回連載の「戦死」などがある．

「排日小話」は，二世の若い夫婦が家を借りる時に，家主の偏見や周囲の人種差別主義者のいやがらせと闘って，ついに信頼をかちとるというエピソードである．これらの随筆の中では，以前の『パイオニア』紙の連載に見られたような軽妙な洒落や諧謔といったものは姿を消して，日系人がたどらねばならなかった苛酷な運命やそれにもめげずに立ち向かう人びとを描いたものが多い．

ささ舟は，1945年2月から同時に，もうひとつ「旅の記」という随筆を10回寄稿している．収容所で外出許可証を申請するところから始まって，モンタナ州ミズーラ抑留所へ友人を訪ね，つぎに長女の嫁ぎ先のソルトレイクシティに15日間滞在し，再びグラナダへ帰るまでの旅行記である．このように同じ作者がほぼ同時にひとつの新聞に複数の連載をもつことはあまり例がない．この時期は多くの人が収容所を出て，外の世界で生活を再建していた混乱期であったため，寄稿者が確保できないという事情もうかがえるが，それ以上にささ舟の書く随筆が

多くの人に受け入れられ，読まれたという証拠ではないだろうか．

現在のグラナダ収容所跡地
1994年　筆者撮影

4．英文誌　*Pulse*

これまで見てきたように，グラナダ収容所では新聞の英語版に文芸作品がまったく掲載されなかった．これを補う意味で，*Granada Pioneer*別冊として，英文誌*Pulse*が1943年5月に発行された．この雑誌は当初，ロイ・ハマジとヨシ・オギタによって企画されたが，ふたりとも完成を待たずに収容所を去った．そのため編集はスエオ・サコーに代った．WRA の出版監督官 Joseph McClelland はまえがきのなかで，物語，随筆，詩の形を通じてグラナダ収容所の人びとの鼓動を伝えたいと述べている．これによって分るように，*Pulse*という雑誌名は人びとの鼓動を意味した．日系人だけでなく，MP や収容所の護衛にあたっている兵士なども加わっている．

作品の内容から，作者はいずれも若い二世であったと推測される．若者らしく収容所内でのデートの話，志願兵となった者の気持，故郷を思い，外部へ出たいというあせりの気持などが素朴な表現で綴られている．この雑誌の編集を担当したスエオ・サコーは，“Oh,If They Only Understood”[25] と題する小文で，“walking library”，“book worm”などと呼ばれている社交下手のタローという青年が，収容所のダンスパーティに憧れの女性を誘うまでのいきさつを綴っている．どんな環境におかれても若者たちは，日々の生活に小さな楽しみを見出している．いつの時代にも変らぬ青春のひとこまが描かれていてほほえましい．

ヨシ・オギタの“Pondering Over Coffee”[26] は，カリフォルニアで生まれ育った青年が，他の州へ出て行きたいと考えていたが，コロラドの収容所へ移されて初めてカリフォルニアの良さを認識し，早く帰りたいと願う気持を描いている．青年はコーヒーカウンターに立ち寄って，コーヒーとドーナツの軽食をとるのが習慣だったが，そのカウンターの雰囲気は，カリフォルニアとグラナダでは大きな違いがあった．砂ほこりで髪が真白になってしまうほど強風が吹き荒れる収容所のコーヒーカウンターで，彼は気候温暖なカリフォルニアでの生活を懐かしむ．オギタは，対照的な2カ所のコーヒーカウンターを描写することによって，その環境の違いをくっきりときわだたせ，青年の気持を素朴に描いた作品である．作品中の青年はオギタ自身であり，彼はこの随筆を書いたあとすぐに収容所を去った．どこへ行ったのかは定かではないが，最終的には彼の希望通りカリフォルニアへ帰ったことであろう．

フミ・タカタの随筆“Amache in the Rain”[27] は，乾いたグラナダの大地にようやく雨が降って，春の気配が感じられる頃の収容所風景を描いている．雨によって大地に生気が戻ると，人びとは待ちかねたように庭仕事を始める．カリフォルニアから来た老人たちが，雨で潤った大地の匂いを懐かしみつつ花作りをしている．二世のタカタはそのような老人たちの姿を優しく見守っている．佐々木ささ舟も「長屋の猫の額」という随筆の中で同じような老人を描いているが，ささ舟とタカタでは老人を見る眼が異なっている．タカタは老人が花を植えて，故郷カリフォルニアの大地を思い出していると書いている．しかしささ舟は一世として，もう一歩老人の心の中に踏み込んでいる．老人たちは単に懐かしんでいるのではなく，強制収容という合衆国の措置に対して無力だった自分にいらだち，それを鎮めようとして黙々と土を耕しているのだと書く．同じものを見るにも一世と二世では大きな違いがあることを，この二つの随筆は示している．

詩は短い作品ばかり6編が掲載されているが，この中で対照的な2編を見ることにする．一つはショージ・オニキの“I Love You My America”[28] で，次に引用する．

……（判読不能のため4行省略）……

You taught me to believe in the right for life,
　liberty, and the pursuit of happiness.
　So when they ironically ask, do you believe?
I proudly answer, with my head held high;
　I am an American.

Then came the memorable December the Seventh.
　Because of the blood that flows in my veins;
　people were forsaken and shunned.
　Discriminated they were put into camps.
Oh, how my heart was sore with grief;
　For my America had lost a chance to
　prove herself to the world.
Today forsaken, discriminated, trampled, and shake
　I still believe in you, my America.

My America is not that America which put me
　here.
　My America is far greater, more beautiful,
　the living dream of our forefathers.
Perhaps, that America is dead for some;
　But for me, it is living underneath
　in the hearts of true Americans.
So no matter how hard the test,
　The suffering I may endure;
My destiny is forever linked with yours.
　I still love you, my America.

オニキはグラナダへ来る前のサンタアニタ仮収容所でこの詩を書いた．これはある意味で多くの二世の当時の気持を代弁するものであろう．彼は独立宣言の中にうたわれている生命，自由，幸福の追求の権利を信じていたにもかかわらず，日本人の血統をもつという理由で収容所へ送られた．合衆国からのひどい裏切りであった．彼は落胆するが，それでもなおアメリカを信じようとする．自分の信じるアメリカは，自分を収容所へ入れたアメリカではない．この時点で，ある人にとってアメリカは死んだも同然であったが，彼にとってアメリカはまだ真のアメリカ人の心の中には生きていると信じている．いつの日かアメリカは必ず正しい姿に戻るであろう，そのためには試練にも耐えていこうと彼は心に決めている．自分はアメリカ人なのだからアメリカに忠誠を尽すのは当然と考えた二世たちは，このように考えて自らを納得させたのであろう．憲法に保証された人権を蹂躙されても，彼らはなおアメリカを信じていかなければならなかった．この詩には，自分を裏切ったアメリカを再び信じるよう自分を納得させねばならない二世の苦悩がにじみ出ている．オニキはこの後，戦闘部隊の兵士となってヨーロッパの戦場へ向かった．

次にヨシオ・アベの詩“Imperfect Prairie”[29]を引用する．

A watchtower lonely on the prairie
Goggled its gray monocle in the high wind.
Watching the slowness of the changing color
Of winter day, from deep purple of dawn
To yellow noon and to dark brown of dusk,
The prairie knew no strangers from the West Coast
Who from the corner of America
Uprooted into the center of America
To slip between military-cup and politico-lip
But the prairie was yellow from the beginning
And was still yellow,
Tho' the winter has beaten her with,
The white of snow and the black of frost,
The wind changed, and hollowed
Its direction every day.
But the prairie stood unmoved,
Nonchalant of rise and fall of life
As though a heave of her abundant breast.

One snow-is-coming day
Stripped cottonwood trees ripped
The shoulder seams of the prairie.
…Don't carry high you chip.
The wind is sharp, 'nough to blow you down
You, down-and-outer!
And the low diving clouds menaced the wounded homage.
There a wise old man said, “Seek the firesides
Of the meakness, under the cover of yellow
Skin of the prairie.”（like cattle safe in the corral）
Defied a young man－Stand high against
The wind of hatred, and shout the very battle-cry of the War－
The expanse of the winter desolation
Seeped away their voices,
As frost thawed under sagebrushes
And the earth was as black as it could be.
Yet the prairie was yellow from the outlook.
……後略

この詩の作者ヨシオ・アベは帰米二世である．彼は1911年，オレゴン州ポートランドで生まれ，10才の時両親とともに日本へ行き，25才のときに再びアメリカへ帰った．彼は日本で小学校から大学までの教育を受けた．彼が行った日本は，まだ大正デモクラシーがわずかに残る時代であったが，それから次第に軍国主義の時代になり，再び渡米した1936年には満州事変が起きて，まさに15年戦争に突入する時であった．したがって彼は日本で完全な軍国教育を受けたことになる．それゆえ彼は前出のオニキのように，自分を裏切った合衆国を心から信じるとは言い切れなかった．アベの心はもっと複雑である．

この詩のなかでアベは，冬枯れの大草原の黄色を収容された黄色人種・日本人のシンボルとしている．彼は他の帰米二世のように合衆国に不忠誠を表明して，隔離収容所へ送られる道は選ばなかった．しかし忠誠の気持は，オニキとは異なっている．それは“wounded homage”であって，アベはオニキのように合衆国が本来のあるべき姿を失ってもなお，その国に忠誠であるとはっきり言い切ることはできない．アベが忠誠を選択した過程は，屈従に満ちている．家畜のように収容所の柵の中に入れられて，ここは安全であると言われ忠誠を求められても，それは彼にとって屈従以外の何ものでもない．自分が忠誠を選択したのは，心地よい暖炉を求めたのではなかったのか．アベの心はゆれ動く．しかし彼は気をとりなおして，嫌悪の風に立ち向かい，戦いの鬨の声をあげようと若者たちに言う．これはとりもなおさず，自分に言い聞かせることばであろう．彼は合衆国に反抗するのではなく，国内の人種差別主義者およびファシストたちに戦いを挑もうと主張する．最終的には，彼も合衆国軍の1員としてインドに渡り，諜報活動を行なった．この詩は，動揺する帰米二世の真実の心の吐露であった．

*Pulse*のなかには，アベの短編小説“Pipe, Sand and Moon”も掲載されている．これは彼がグラナダへ来て半年ほど経った時に書いたものである．まだ肌寒い3月，風の吹きすさぶ収容所で，サトルと恋人が散歩をしている．散歩といっても強風に痛めつけられながら，収容所の中をぐるぐると歩きまわるだけである．彼がくゆらせているパイプの煙が風向きを教えてくれる．ふたりは結婚も考えているが，サトルは迷っている．“I'm afraid that the longer I stay here, the better I'm going to like this place.”サトルは収容所に長くいるうちに，そこに安住してしまう自分を案じる．“Satoru was afraid of becoming as dry as this land.”しかも枯渇した収容所の環境のように自分もからからに乾いてしまうのではないか．サトルは一刻も早く収容所を出たいと切望している．軍隊に志願するか労働者になれば，外部へ出ることができる．しかし恋人は，ただ収容所から出たいという理由だけで志願兵になることに反対である．サトルはまた，収容所の日本人と同じ生き方をしたくないと思う一方，それらの日本人とのつながりを断ち切れない心の葛藤にも悩んでいる．

恋人は，日本や戦争のニュースのない所で，ラジオから流れる音楽のしらべに耳を傾けながら，ふかふかのソファに身を沈めてパイプをくゆらすサルトルを夢見る．サトルは，今は夢などみている場合ではないと思いながらも，自分もいつの間にか恋人と同じ夢を追っている．しかし現実は収容所の中である．“‘Future …’The word echoed in Satoru's heart. Damn it, what future can he plan in this damned camp and in this damned war……‘No, I mustn't rot in this camp.’”戦争があり，強制収容所がある現実では将来のことなど考えられない．しかしここで朽ち果ててしまいたくない．アベがこの短編を書いたのは，もう30才を過ぎていたと思われる．彼は自らの身の処し方を決めかねて不安にかられる収容所の若者の気持を主人公のサトルに代弁させている．

アベは帰米二世であるが，ヒラリヴァーやトゥーリレイク収容所などで作品を書いた帰米の人びとは異なり，日本語でなく英語で表現した．帰米二世がすべて親日的だったわけではなく，合衆国に忠誠を表明した人もかなりの数にのぼったが，英語を使って文学作品を発表した人は少ない．そういう点でアベは異色の存在であった．さまざまな立場の若者たちの思いを率直に綴ったこの雑誌は，たった1号で終わった．原稿募集の記事があることから，編集者は続けて発行する予定であったと思われる．しかし多くの人が収容所を後にしてしまい，継続が困難であったと推測される．

おわりに

グラナダ収容所は別名アマチとも呼ばれて，コロラド州とカンザス州の州境近くの大草原にあるもっとも小規模な収容所であった．収容者の大多数は合衆国に忠誠なイエス－イエス組で，志願して兵士となった人がもっとも多かった．一方，不忠誠となって隔離収容所行きとなっ

た人はわずか100名あまりであった．そして特別な騒動もなく，すべての中でもっとも平穏な収容所と言われた．ここでは新聞*The Granada Pioneer*（日本語版『パイオニア』）が発行された．新聞紙上の文学活動はきわめて低調で，英語版にはまったく作品は掲載されていない．日本語版にはわずかながら，短詩形文学の作品などがある．グラナダに文学愛好グループがなかったわけではなく，中村梅夫を中心としたグラナダ吟社などが存在した．彼らは所内の新聞だけでなく，当時発行されていたコロラドおよびユタ州の日本語新聞，『ユタ日報』，『格州時事』，『ロッキー新報』などに投稿した．したがって所内の新聞に作品が集中することはなく，分散した形で発表された．

『ユタ日報』には，グラナダ収容所在住の松井秋水が「アメリカ流転文芸」欄を設けて，各地の収容所を統合する文芸欄を編集した．しかし，これは松井の再定住に伴いわずか半年しか継続せず，中途半端に終わってしまった．『パイオニア』および『ユタ日報』で活躍したのは佐々木ささ舟であった．彼は低調だったグラナダの文学活動でただひとり多くの作品を残した一世であった．彼の随筆は，幅広い文学的教養に裏打ちされた軽妙な独特の表現に満ちており，読む者を楽しませるだけでなく，その裏には一抹の悲哀もこめられていて，独自の世界を形づくっている．

英語を使った作品を集めた*Pulse*は，新聞の別冊として発行されたが，わずか1号で終わった．これまで，英文誌が発行されたのはトパーズ収容所のみと考えられていたが，今回の調査でグラナダでも発行されていたことが判明した．ここには若い二世たちの小品が載せられており，強制収容にゆれ動く若者の気持が率直に書かれている．この中で異色の作者は帰米二世ヨシオ・アベであった．彼は，教育のほとんどすべてを日本で受けたにもかかわらず，合衆国に忠誠を誓い，純二世と同じように英語で作品を書いた．彼の作品には，純二世とは少し違う合衆国への複雑な思いがこめられている．

これらのグラダナ文芸人は戦後も継続して，日系アメリカ文学に貢献した．佐々木ささ舟は『抑留所生活』[30]を出版した．松井はロサンジェルスで『米国産業日報』[31]の編集部で働くかたわら，『羅府新報』などに詩を寄稿した．ヨシオ・アベは戦争が終わって除隊後，ニューヨークへ行き，『紐育新報』[32]の編集長として文芸欄を担当し，自らも短編小説などを書いていた．彼は英語の作品を出版しようと努力したが，引き受けてくれる出版社がなく，落胆していたという．彼はその後日本語で書くようになり，1955年に文学同人誌『NY 文芸』[33]を創刊，その編集長をつとめた．彼はあべ・よしおのペンネームで盛んに執筆活動を行なった．このようにして『NY 文芸』はロサンジェルスの『南加文芸』[34]と並んで，米大陸の西と東で日系アメリカ文学の中心的役割を果した．その後彼は1960年に日本へ行き，「民主文学」同人に加わって，1971年に自伝的大河小説『二重国籍者』[35]3部作を完成した．この中には，収容所での生活も克明に書かれており，収容所内で書いた短編小説が基礎となっていることが分る．

文学活動がきわめて低調と思われていたグラナダ収容所であったが，詳細に観察・検討した結果，佐々木ささ舟，あべ・よしおのふたりの個性ある文学者が育てられたことが証明された．

謝辞

この小論を書くにあたり，元『NY 文芸』編集長カール・秋谷様から貴重なお話を伺い，立命館大学教授山本岩夫先生からあべ・よしお関係の資料を提供していただきました．ここにお名前を記し，感謝いたします．

註

1）それぞれの論文は順に『東京家政大学紀要』第27集，29集，33集，34集，35集に掲載．

2）1861年，アマチはこの地に入植した白人ジョン・プラワー（John W. Prower)と結婚した．彼女との結婚でプラワーはラーマーからラス・アニマスまでの広大な土地を獲得し，牧畜によって莫大な富をきづいたという．彼は1884年にカンザス市で死去，アマチはその後ボストンに移り住んで，1905年に亡くなった．収容所が建設された当初，アマチの義理の娘がラーマーに住んでいた．

3）最大人口は1943年2月1日の調査による．

4）黒人の間で流行していた上着丈の極端に長い背広．

5）1919年，安孫子久太郎を中心とするキリスト教徒の日本人によって開拓された農村．カリフォルニア州リヴィングストンの近くにある．

6）農地はエルバート・S・ルール（Elbert S. Rule）所有の土地とアメリカン・クリスタル砂糖会社の所有するコーエン・ランチ（Koen Ranch）の2カ所で

あった.

7）降雨量は年平均400ミリ，積雪は59センチ，最低気温は摂氏零度，最高気温は摂氏25度.

8）「へびとコオロギ」,『ぱいおにあ』7／5／43付.

9）第2次日米交換船は1943年9月15日にニューヨーク港を出発.

10）トゥーリレイク行きの人びとは9月15日にグラナダを出発. 1944年2月にも日本へ帰国希望者13名がトゥーリレイクへ移動した.

11）収容所から Granada, Larmaer の町へシャトルバスが往復しており，人びとは外出許可を受けて買物に出かけた.

12）日米開戦と同時に西部沿岸に定められた軍事地域内のすべての日本語新聞に対し，発行停止措置がとられた. ユタ，コロラド州では一時休刊になったのち再発行が許可され，戦争中に日本語で読める希少価値のある新聞となった.

13）『アメリカ生活』（ロサンジェルス，大衆社，1937年). アメリカ人の生活ぶりをおもしろおかしく語ったこの著作は，現在と違って情報の少ない日本人にアメリカを理解させるのに役だった.

14）1944年9月13日から10月4日までの連載. それ以前については新聞が残っていないため不明.

15）8Hは収容所の建物につけられた番号.

16）四本柱とは，相撲の土俵にたつ柱を指す. グラナダでは相撲が盛んで，娯楽の少ない収容者に大人気であった.

17）10月11日から11月15日まで8回の連載.

18）ささ舟と区長会の応酬は1945年4月11日，14日，18日に掲載.

19）7月14日，18日に連載. 21日に中止の弁.

20）『パイオニア』2／10／45付に掲載.

21）サンタアニタが競馬場に急造された施設であったことから「うまや」と名付けた.

22）松井秋水「アメリカ流転文芸欄設置について」,『ユタ日報』10／2／42付.

23）詩と短歌はともに『ユタ日報』12／18／42付.

24）「哀れな此繼子」,『ユタ日報』2／26／45付.

25）*Pulse*, P. 3.

26）*Pulse*, PP. 5－6.

27）*Pulse*, P. 17.

28）*Pulse*, P. 4.

29）*Pulse*, P. 1.

30）佐々木ささ舟,『抑留所生活記』（ロサンジェルス，羅府書店，1949年）

31）1935年に南加農会連盟の機関紙として創刊. 初め『加州農産週報』，次に『加州産業日報』，1938年に『米国産業日報』と改題.

32）1910年創刊のニューヨークで発行された日本語新聞.

33）1975年までに11号をニューヨークで発行. 初代代表はあべ・よしお，あべの日本行きによって，代表者はカール・秋谷に受け継がれた.

34）1965年創刊の文芸同人誌.

35）1971年，東邦出版社.

Summary

Literary movements in five of the U.S. concentration camps during the World War II were already examined by this author. In this essay, literary movement in the Granada Relocation Center is discussed.

The Granada Relocation Center was located on the desolate prairie in Colorado which was once a hunting ground of the native Americans, the Cheyenne Tribe. This was the smallest camp of all and more than 90 percent of the evacuees were loyal to the U.S. As any kind of riot did not happen, people enjoyed their lives in peace in spite of the harsh climate and poor living conditions.

There were various literary activities. Community paper, *The Granada Pioneer* was published semi-weekly in both English and Japanese. Lovers of literature contributed their works to the paper. Shusui Matsui, Issei man of literature began movement of "American Vagrant Literature" and became an editor of the literary section of *the Utah Nippo*. Sasabune Sasaki, an Issei essayist who was the author of *Amerika Seikatu* (American Life) before the war, also wrote many essays in several newspapers. His essays full of wit and satire were read by many Issei.

English literary magazine *Pulse* was published as the supplement to *The Granada Pioneer*. Young Nisei created poems, essays and short stories,

expressing truly their thoughts. Among them Yoshio Abe, who was a Nisei educated in Japan, wrote poems and short stories. After the war he settled in New York and became an editor of *The New York Shinpo*. In 1955 he published literary magazine, *NY Bungei* with his friends. This magazine played an important role in Japanese American literature as well *as Nanka Bungei* in Los Angeles.